

子どもたちに惹かれた良寛 三

西をさむ

私が子どもの頃、よく葬式ごっこをして遊びました。専ら草叢でする遊びですが、五、六人集まれば春と秋には必ずしていました。一人が坊さん役、あとは家族や友人で、もう一人如何にしても欠かせない役が要りました。其れは死人役です。笑われるかもしれませんが、これが最も難しい役柄です。胸の上で両手を組んで目を瞑り、白いハンカチを顔に被せて体を真っ直ぐに伸ばし微動だに出来ません。其の内、生臭坊主役がお経を唱え始めます。「アーホンダーラ、アーホンダーラ」と。すると他の者は自分達で摘んできた花や葉っぱを死人役の身体が見えなくなる位乗せてゆくのです。この間、笑いを堪えていなければなりません。到頭堪え切れずに吹き出して起き上がると皆は一斉に「わあっ」と叫んで逃げ去るのです。他愛無い子どもの遊びです。

良寛は、子ども達と遊ぶのが大好きでした。子ども達が遊び疲れるまで一日中でも遊び相手をしました。良寛だって生身の人間です。疲れて休みたい時だって有ったでしょう。然ういう時に野原に寝転がってうとうとしていると、子ども達は葉っぱや花を摘んで来て良寛の身体の上に並べ始めるのです。そう葬式ごっこです。良寛は死人役を仰せ付かったのです。酒も煙草も嗜んだ良寛が坊様には成らずに死人に成るとは本当に生臭坊主だったのかもしれませんが。

山は花酒屋酒屋の杉ばやし 良寛

ここでちょっと解説、杉ばやしは杉林の事で、酒屋に杉の葉を球状にして軒先に掛ける所謂、杉玉の事です。ここでわざわざ杉ばやしと言ったのは、「ばやし」を「囃子」と気付いて欲しかったのです。「酒屋酒屋」は、もうお解りですね。「咲けや咲けや」の掛詞です。こうなれば駄洒落のオンパレードです。でも此れは誰も罪に問われない高等技術です。何処か子どもじみた無邪気さが有ります。ここで皆で滑稽ケッコウと嘴を揃えて合唱してみませんか。きっと俳句界に黎明期が来るでしょう。

良寛や一茶が俳諧師として生計を立てられたこの時代は、文化的に日本が一番輝いていた時代だったと思います。つましくとも未来に希望を抱き生きてゆく人達を芸術家にまで育て上げたのですから。

良寛が七十歳の時に四十も年下の貞心尼と出会います。二人は何時しか

恋愛感情を抱く様に成ります。でも多分違っていたと思います。良寛は貞心尼に面倒を見て貰って居て、彼は子どもに帰って素直に彼女に甘えて居ただけだったのです。然うして死に際に「何か心残りは有りませんか」と聞かれ「死にとうない」と答えたのです。子どもに帰ったのだから死など想像も付かなかったのでしょう。

私だって四十も年下の女性が傍らに居てくれたら決して死にたくないと思います。

散桜残る桜も散る桜

良寛

(完)

参考文献 恒文社刊 「良寛の逸話」